はじめに

このたび、人の晩年や末期の在り方をめぐる、私たちの提言を公表する運びとなりました。２年という短い検討期間でしたが、医療、介護、行政、NPO、ジャーナリズム、文化研究といった諸分野にまたがる対話の産物です。

静岡県が「健康長寿県」として、高齢者がそれぞれの晩年を多彩に生き、まっとうされることを支援しようとするのであれば、その旅立ちもまた、その人らしく歩み出され、また見送られることへの、公私にわたる配慮や連携のしくみが一体となっていることが望まれます。この提言では、私たちが望ましいと考える〝書面による意思表示〟を活かして、その人らしい晩年や末期を実現するためには、現在どのようなしくみがあるのか、それをさらに実効あるものとするには、どのような手立てがあるのかについて語っております。そして、そのようなしくみや手立ての活かしかたが県内広くゆきわたるために、今できること、さらに時を要しても実現が望まれる法制化にも触れております。

検討を始めて１年後、奇しくも新型コロナウイルス感染症がこの国にも急速に広まり、その後の私たちの会合も、やむなく電子媒体頼みとなりました。他方、２年目の検討が進むほどに、まさに日々の暮らしの中で、生と死のへだたりが紙ひとえ、否むしろ一体のものとしてあるという実感を、検討会のメンバーそれぞれが、これまで以上に深めることとなりました――そう、年齢にも体調にもかかわりなく。同時にまた、いずれの生も遠近さまざまな人や人以外の生命に支えられてかろうじて続いていることについての感覚も研ぎすまされました。そうであれば、死もまたそのような支えとともにあった生の続きとして迎えられてこそ、とあらためてうなずいたのです。

この提言は、そのような〝新しい日常〟のもとにまとめたものですが、まず、心身のはたらきがそれなりに保たれているうちに、自らの晩年と末期について、医療、介護、そして周囲の人たちとともに考え、どのような末期が自分にふさわしいかについて、機会あるごとに書面で残すことの大切さを語っております。現代医療に関心のある多くの人は、「ACP / Advance Care Planning / 人生会議」と聞いて、つい、いわゆる看取り段階の医療行為の選択のことと、限定的に思いがちです。しかし、私たちの視野の中では、末期の迎えようは、老年自体をめぐる文化の豊かさや、老若相携えての生活の質といったことと広くつながっていました。じつは、このつながりの議論を深める機会をさぐりながら、ついに時と場にめぐまれず、いわば宿題となりました。

なお、この検討会の発足時には、晩年や末期の医療・介護のあり方について、〝静岡モデル〟を提案できればとの声もありました。しかし第一の難題は、用語が外来のもので専門家どうしにしか正確には通じない、しかも和訳語がほぼ固まっていても、その新造語の意味や語感に親しめない人があまりに多いということでした――たとえ、それらの言葉が行政や医療・介護の現場ですでに何年か使われてきたとしても。

なんとか普段の生活の中でも語りやすいような言葉への置き換えができればと考えはじめたのは、２年の検討が終わろうとする頃でした。晩年や末期についての本人の希望を書面にとどめる際には、「リビングウィル」や「人生会議覚書き」などと並べるよりも、空白をゆったり残すただひとつの書式、たとえば、「生きかた死にかた――私のこだわり覚え」 を参考にするだけでよいといった方式が提案できればとの考えも生まれました。しかし、それで一貫させるには、いま少し検討が必要です。

ここでは、私の〝夢〟をひと言述べて、前書きを結ぶことといたします。この提言では、ご本人の個性ゆたかな意思表示の書面をできるだけ定期的に見直すように勧めております。それに添えておこうとの意です。 ―― 令和〇年２月下旬のテレビニュース。キャスターさんの声。「静岡県各地では、毎年 ２月23日の『富士山の日』に、生きかた、死にかた、ともにまっとうなものにしたいと願う人を親しい老若が囲む年中行事として〝書面改め〟が行われています。書面は、県内の多くの人が、『親子健康手帳』とあわせて持っている『ふじやま手帳』の初めの数ページのことです。この日、かつて不老不死の山と語られた霊峰を眺めたり想ったりしながら、不死ならぬ身であっても、かのお山の近くに居合わせる〝今〟をともに楽しむ光景が県内あちこちで見られます。今年も…… 」と音声が続くあいだ、さまざまな人びとの表情が富士山を背景にした映像で紹介される――

令和３年３月

静岡県「人生の最終段階における医療・ケアの在り方」に関する検討会

会長　横山俊夫